
初恋成就。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋成就。

【Nコード】

N1371U

【作者名】

奥田徹

【あらすじ】

夏木さんが結婚式当日、式場に来ていなかった。バイクで来た僕は迎えに行けと言われる。夏木さんは僕の初恋の人だった。

夏木さんは結婚式当日、式場に現れなかった。

その事を同級生の睦美から聞かされ

「とにかく迎えに行つて」

とバイクで来た僕に連れて来いと言う。

「まだ誰にも気づかれてないから早く！」

僕は事情もよく解らないまま、住所と連絡先を携帯に赤外線送信され、

夏木さんの元へ向かった。

夏木さんは僕の初恋の人だった。

小学三年生の時、同じクラスで中学卒業まで、ずっと好きだった。

片想い。

バイクを飛ばし、昔の事を思い出し緊張していた。

僕はほとんど夏木さんと会話した記憶がない。

ただ一度だけ、五年生の時、放課後の教室で二人だけになった事がある。

僕は教室の机の上、寝たふりをして突つ伏していつも窓の外を見ていた。

「帰らねーの？」

「ん？ちよつと寝てく」

今考えたら不自然な台詞。

窓の外、夏木さんを眺めてから教室を出る。

それが僕の日課だった。

その日はいくら待っても夏木さんは現れず、見逃したかと思い、そろそろ帰ろうかなって思った時、教室の扉を閉める音がした。

僕は寝たふりをしながら、腕の隙間から薄目で誰が入って来たのか確認してみた。

夏木さんだった。

夏木さんは僕の席から右斜め三つ先の席。

そこへ座り、机の中の教科書やらノートをランドセルに入れていた。

僕はドキドキしながら、震える息遣いに自ら耳を澄ませ、

スーピーと鼻から息が不規則に音を立てる事に

脳内が破裂しそうな程焦り、息を止めた。

夏木さんの動く音を聞き漏らすまいと、全身で教室内の空気に体を預け、

この一時によつて何も失わない様にと祈ると共に錯乱していた。

暫くの静寂。

その無音が遠くの笛の音の様に耳の中を左から右へ通り過ぎる。

僕は、再び腕の隙間から薄目で覗いた。

夏木さんはまだ教室にいた。

椅子に座り、体をこちらに向け

僕をジッと見つめていた。

僕はハツと息を呑み、固まり、必要以上に目を閉じた。

心臓が連続花火の様に音をたて乱れ、全身が発汗し、ジットリとした湿り気が腕と顔の隙間を覆った。

「弱虫…」

夏木さんの声がした。

それでも僕は顔を上げる事が出来ず、

暫くの静寂後、怯える様に薄目で覗いた時、夏木さんはもういなかった。

携帯で住所を確認しながら20分程で、夏木さんのマンションへ到着した。

僕は駐車でバイクを降り、夏木さんに電話した。

四コール目で出た。

「はい、もしもし…」

「夏木さんですか？」

「はい、あの…」

「福岡です。小中学同級の」

「福岡君？」

「今、マンションの前にいます。式場へバイクで送ります。」

「え?…」

オートロックの自動ドアから、十年歳を重ねた夏木さんが出てきた。ストレートに長い栗色の髪、焦げ茶のボタンシャツに白いパンツを穿いていた。

綺麗だった。僕は心臓の高鳴りと、

胸の奥が締め付けられる感覚を同時に感じた。

「福岡君…お久しぶり…あの」

「急ごう」

僕はヘルメットを夏木さんに渡し、必要以上に急いでいる様に振る

舞い、
言葉を遮った。

夏木さんを後ろに乗せ、バイクを走らせる。
背中に夏木さんの温もりを感じながら、

僕は自分が一体何をしているのか混乱した。

このまま、ずっと遠くまで

彼女を連れ去る事が出来たら…。

10分程走らせた所で、

「止めて！」

「は？」

「お願い、止めて！」

夏木さんが大声で、僕に言った。

僕はスピードを落とし、バイクを路肩に止めると、

後ろに乗っていた夏木さんが、ゆっくりとバイクを降りた。

「夏木さん？」

「…ちよつと待って。」

夏木さんは、ヘルメットを外し、道路沿いのガードレールに腰掛けた。

「大丈夫？」

夏木さんは小さく頷くと、口元に軽く笑みを浮かべ、山道の先を見つめた。

「…」

沈黙がそよ風に乗って、夏木さんの髪を揺らす。

「もうすぐだよ。行こうよ。」

「ねえ、福岡君…」

「ん？」

「二人で逃げない？このまま」

「え？」

夏木さんは遠く、山道を見つめながら言った。

「私ね…福岡君の事好きだったんだよ。」

唐突な告白だった。僕は言葉を失い、立ち尽くし、あの教室の放課後の様に、失いそうな何かに怯え、足が震えた。

「夏木さん？」

「…私、知ってたよ。福岡君がいつも私を見てたの。」

「え…」

僕は体中が汗まみれになり、異様な体臭が辺りを覆って行くような気がした。

涙が込み上げてきたが、寸前で止め、息を吸い込んだ。

「夏木さん。行こう！」

「…ねえ、私の事嫌い？」

夏木さんが不安そうに僕を見つめ、聞いた。

僕は、体中が心臓になってしまったんじゃないかと思っくぐらい鼓動が全身に響き、

「…好き、大好きでした！」

「え？」

「だから…だから幸せになってください！」

大声で叫んでいた。

涙が溢れ、吐き気を飲み込んだ。

「…福岡君。」

「行きましょう！引き返す場所何てないんです！」

夏木さんは、微笑み、

「弱虫…」

と言った。

僕は夏木さんを無事、式場に届けた。

夏木さんの気持ちは僕には解らない。

でも誓いの言葉を口にする

夏木さんと幸せそうな友人を見つめ、

僕は二人の新たな門出を喜び、祝福した。
心から…。

(後書き)

似たような話、映画用に書いてましたね。昔。「ガソリンゼロ」。
でも全然違うもん。()
今日は福岡君と久々に仕事したので、名前を借りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371u/>

初恋成就。

2011年10月9日03時14分発行